



皮を縫い合わせ、描いた巨大な皮綿帽(かわんちま) 〓新潟市

こうのいけ・ともこ 1960年、秋田県生まれ。絵画や彫刻、映像、絵本など、多様な素材と技法を駆使した「物語的」な作品で知られる。近著に「どうぶつのごとば」(羽鳥書店)。2018年秋、秋田県立近代美術館で個展を予定。



この世に一つの作品を生み出すために日々格闘する美術家たちは、どんな思いで自らの作品と向き合っているのでしょうか。新企画「つくる・かたる」(随時掲載)では、記者が個展の会場やアトリエを訪ね、その思いに迫ります。



### 言葉もち生きる喜びつかみ直す

鴻池朋子 @新潟県立万代島美術館

年明け、新作の撮影のため、吹雪の中を秋田県に上った。穴を掘って首まで雪に埋まり、フィラメントと秋田の民謡を掛け合わせ、歌うち、大きく開けた口から何かがいっぱい入って「ん」と感じた。「息を吐いて吸って、山は何かを交換しているような、どこか危ないような感じがして、下山したらずがすし気がたかくなっていった」と鴻池朋子は振り返る。それは「生きていく」と「生きる」といふ世界の交換を感じてきた。いま新潟県立万代島美術館(新潟市)で個展を開催中だ。2015年秋に始まり3カ所目(場所)とに構成や展覧会を変え、今展「皮を針と糸と」(12日まで)は、秋田の山の集落の女性たちが手で縫い上げたランチョンマントに胸を加えた。胸を開けた大、口減らした流石な、女性たちが語る驚きや恐れ、の体敵を砲台が下絵に描き、女性たちが縫う手芸のフィラメントは14年が経ち、舌を噛みつぶす、手縫い手が伝えたかたがたは、外に表すばかりが表現ではない。隠すことも大事だ(と気づいた)。似た思いを、同じ取り組みを行う愛州タスマニアでも抱いた。なかなかに故郷の村の跡で思い出す



見れば見るほど発見が多い、新作の「誕生」 〓佐賀市



### 祈りと希望 未来につながる絵を

池田学 @佐賀県立美術館

近寄って見たい。池田学の作品はそんな衝動に駆られるものばかり。スケール感のある画面は多彩なモチーフの集まりで構成されているからだ。細密な線を重ねて仕込んだ絵画を生み出す超絶した描写力。それこそ池田の持ち味だろう。郷里にある佐賀県立美術館(佐賀市)で開催中の個展(3月20日まで)は、主要作をはじめ、幼少時代のスケッチ、朝日新聞で10年担当した法廷画など約120点から足跡をたどる。池田の作品は、画面に溶け自分史とも言うべき小さな物語を読み解く楽しみがある。いまだ、まなま、1973年、佐賀県生まれ。東京美術大美術学部デザイン科を経て、同大大学院。13年から新潟県。同大美術部。He Po. 雑誌の宇宙。は、東京日本橋區(9月27日、10月9日)に巡回。例えは、東京芸大の卒業制作「腰の王」(1998年)は、曖昧のロククラミンングで見た岩山などを写影。2004年の「存在」は、東亜アジア放浪旅の記憶が大きなモチーフとなっており、一瞬と自然の共存という一貫したテーマがあり、そこに日々の関心事を描き込んだ「絵に描くかどうか」と考え見聞する時は職業病です。使う道具は先の太さが1.5に満たないペンとカラインク。下絵を描かず短い線の重なりから濃淡をつけ表現する。繊密さゆえ、日に描けるのは極少量の大きさで、境界で、完成まで膨大な時間がかかる。個展で注目されるのが、「新たな代表作」となった「白身が語る新作の「誕生」」。米国のチエネ美術館で公開制作しながら、3年かけて仕上げた。縦4横4

### 評

### 「ハナヤ勘兵衛の時代デェ!!」 宿る構成美待たれる評価



ハナヤ勘兵衛(いう名前)と作品はどれほど知られているだろうか。本名・桑田和雄。1903年に大阪で生まれ、兵庫県屋敷で長く活動し、91年に亡くなった写真家だ。今回の作品群を同時代、真の時代の輝きに輝く。父からカラをもらって上海でも写真を作り、29年に芦屋に写真材料店を創業。翌年、中山岩太郎と「芦屋カメラクラブ」を結成した。その初期作は実験的かつ斬新だ。重ね焼きや極端なクロアツアップ、ぼかし、オブジェを使った画面構成を通して、シュルレアリスムの世界を見せている。当時、新興写真運動と呼ばれた傾向だが、確かな構成感があるから、写真としての美が生まれる。例えは「船」(30年、個人蔵) 〓写真右、技法はオートソ

この世に現れた直後の新生児を撮った一枚も真正面から迫るセンスが、なるほど一瞬の瞬間(62年、芦屋市立美術館博物館)と呼びうる崇高さを見せている。同左。これほどの表現を残し、全日本学生写真展をやるなど写真の地位向上にも奔走したのに、相応の評価を得ていないのは残念に感じられる。全休像が分かる出版物も限られている。中山岩太郎の陰に隠れてしまった面もある。関西で迎えたことも、全国的な評価が進まない一因だろう。その意味でも、代表作「ランチョン」(21年)は、残した写真世界は、ニエーターにも、十分に力がある。さなる検証があてい。〓(編集長・大器人) 〓3月1日まで、神戸市の兵庫立美術館。月曜休館。

### 民芸運動 映像で振り返る 東京・有楽町

大正～昭和にかけて、庶民が使う日用品に美を見いだした「民芸運動」。その主要メンバーだった陶芸家のバーナード・リーチ(1887～1979)が戦前のメンバーの様子や、日本各地のものづくりの現場を撮影した映像の一部が今、東京・有楽町の「無印良品有楽町」のギャラリー「ATE LIER MUJI」で公開されている。リーチは34～35年、焼き物で有名な栃木県益子町などを旅して撮影。中には、運動の中心的存在だった思想家の柳宗悦(1889～1961)などメンバーも登場する。会場では、フィルムから抜粋した画像をモニターで展示。このフィルムの映像も使った、かつての益子や神楽の陶器づくりの様子をまとめた映像も16日まで上映中。3月26日まで。

1934年のバーナード・リーチ撮影のフィルムから。リーチ(右から4人目)と陶芸家・浜田庄司(左側で子供を抱く男性)の姿も



日まで。(丸山ひかり)